# 巻頭言　ウィズコロナと学会年会

池田　匡志
藤田医科大学医学部精神神経科学

皆さん，はじめまして。昨年から理事を拝命いたしました藤田医科大学の池田匡志（いけだ まさし）です。本稿を執筆している 2022 年 7 月中旬は，COVID-19 の第 7 波の始まりを迎えたようですが，当初のような絶望的な気持ちになるほどの急性ストレスではなくなり，やはりウィズコロナへの期待が芽生えているのだと強く感じます。

さて，わたしは第 7 波直前の 6 月 30 日から 7 月 3 日まで沖縄で開催された Neuro2022 に，万全の注意を払いながら参加してきました。久々に遠くで開かれる学会で，飛行機に乗るのが 3 年ぶりということで，改めてこの 3 年余の異常事態を認識する機会となりました。

コロナ禍の当初に予定されていた学会年会の多くは中止を余儀なくされ，次第にオンライン・ハイブリッド開催とさまざまな開催方式の変遷・定着がありました。わたし自身は，「学会は呼ばれたもの以外行かないほうがよい。その間に実験するほうが重要だ」と，スパルタな教えを受けてきたこと，さらには自分自身が出不精ということもあり，オンライン･ハイブリッド開催を満喫してきたタイプでした。しかし，年会において，大学院生時代からの他大学の友人（とても偉くなっている人が多くなりました）や，多くの先生方と face to face で気兼ねなく話し合い，研究の方法や解釈などを議論し，アイデアをインスパイアされること，さらにはくだらない無駄話をすることを 2 ～ 3 年も奪われてしまうと，さすがに学会に参加する「裏の」の意味に気付かされました。すなわち，わたしにとって，研究仲間とのやり取りで感じる「空気」こそが学会年会の大きな役割を占めていたことを認識しました。

他方，そうしたことを微塵も考えていなかったころ，特に若い時代の学会参加のメインはというと，かなりストイックに「勉強」させていただいておりました。これはゲノム研究を専門にしていたためなのかもしれませんが，学会に参加し始めた当時（2000 年代前半）は，きわめて多くの大学の先生がゲノム研究を実施・発表しており，まさに「競争的」に発表を聞いたり，ポスターの写真を撮ったりが学会の主目的でした。他の大学の先生，特に目上の先生とおしゃべるすることはあまりなかったように思います（少数の大学院生同士はしゃべったりしていて，上述のわたしの友人関係を構築しています）。

しかし，現在では，サンプル数を拡大するために，多くの大学の先生と共同研究の相談を行いながら，「よりよい結果」をめざすという「共闘」モードが自然な空気となっています。まるで昭和のプロ野球で，他チームの選手としゃべると監督に怒られていたが，現在では塁上において談笑しているという変化と同じで，仕事に対する文化，そして自分自身が成熟したのかなと考えています。

こうした「共闘」は，精神遺伝学の分野では顕著であり，例えば Psychiatric Genomics Consortium（PGC）は，「みんなで精神疾患の感受性遺伝子を探そう！」と，誰も文句を言わずに結果を提出します。そして，リーダーの統括のもと，きわめて民主的に運営されています。こうした大きなコンソーシアムで，PGC ほど自己を捨て，他者に協力するものはないと人類遺伝学の友人から聞くに至り，さすが精神科医が多いだけはあるな，と誇りに思いました。

さて，ウィズコロナの話から始まって，研究の「共闘」までまとまりなくなってしまいましたが，今後は学会年会をさらに有意義に活用しようと心に誓っています。本年度は，本学会（加藤忠史先生会長）に加え，日本臨床精神神経薬理学会，日本神経精神薬理学会，日本精神薬学会の 4 学会合同年会であり，さまざまな魅力的なプログラムがありました（執筆時点では「あります」ですが）。また，来年度は，藤田医科大学の岩田仲生教授が会長となり，沖縄のブセナテラスに隣接する万国津梁館で開催されます（2023 年 11 月 6 ～ 7 日予定）。これは現地開催のみであり，まさに face to face で親交を深め，「共闘」する場を提供したいと思います。ぜひコロナに気をつけて，ご参加を予定いただけますよう，よろしくお願いいたします。